

日本漢音研究の現在

漢字音研究 の現在

特集

佐々木 勇

1 「日本漢音」とは何か

現在、日本の中学校では、漢字の音には、「漢音」「呉音」「唐音」などが有る、と教えられる。

たとえば、次の通りである。

奈良時代以前から、明治維新後に西洋文明が入るまで、日本において文化のお手本のほとんどは中国大陸（朝鮮半島を含む）からのものでした。多くの物や考え方が、その名称（語）と共に日本及び日本語に入ってきました。いつごろ、中国のどの地方から、何と共に（何の名称として）入ってきたかによって音に違いができました。

基本となるのは漢音ですが、伝来が早い語や仏教に関する語には呉音が、禪宗に関する語や調度品に関する語には唐音があります。その語を知らなければ、正しく読めませんね。

〔中学校国語 2〕（平成十七年三月検定済み、学校図書）
「語を見抜く 1……語の読み方」

右の文章とともに、中国から日本に三本の矢印が延びた地図が載せられ、その地図中に、呉音「行者」^{キョウ}「明星」^{メイ}「行進」^{コウ}「明快」^{メイ}、唐音「行火」^{アツ}「明朝」^{ショウ}の例が挙げられている。

ただし、呉音より古く伝わった音も存し、「古音」と呼称されている（本誌犬飼論文、参照）。

このうちの「漢音」を、漢字音研究では、日本漢字音中の一体系であることを明示するために、「日本漢音」と言う。(後に述べるように、この「日本漢音」は、厳密には一体系ではない。しかし、本稿では、教科書や漢和辞典で使用される「漢音」の範囲で、「日本漢音」の用語を用い、しばらく進める。)

この「漢音」「呉音」「唐音」などによって成り立つ日本漢語の、当該語における音が、「漢音」「呉音」「唐音」のいずれであるかを区別する必要は、現代の日常生活においては、まず無い。

しかし、どの音も、「名称(語)」の音として日本語に定着しており、漢字単位で見た場合、複数の音が当該漢字に存する場合がある。そのため、国語教育・日本語教育上は、その理由を説明しなければならないし、日本語となった当該漢語について知るためには、日本漢字音の種類に関する知識は、必要である。

2 「常用漢字」における日本漢音

右の教科書には、「基本となるのは漢音です」とあった。

今、この点を、現代日本語における基本的な音を反映

していると見られる、新「常用漢字表」(二〇一〇年(平成二十二年)十一月三十日告示)で確認してみよう(常用漢字表とのみ記した場合、現状では、新・旧常用漢字表のどちらを指すのか不明確であるため、今回の対象とする、二〇一〇年告示「常用漢字表」を、以下、新「常用漢字表」と呼ぶ(注1))。

新「常用漢字表」は、常用漢字二一三六字を掲載し、その常用漢字に、二三五二の音と二〇三六の訓とを付している。音の方が、多数である。

これは、漢字表を一見して知られる通り、音のみ掲げられ、訓が掲載されない漢字が多いためである。この点からも、漢字の音が、日本語に大きな位置を占めていることが知られる。常用漢字表(昭和五十六年内閣告示第一号)以来、漢字表の「字種」が、「字音によつて五十音順に並べ」られている所以である。

次に、この、新「常用漢字表」二三五二の音を、漢音・呉音・漢音呉音同音・唐音・慣用音に分けてみる。

漢字の漢音・呉音等は、『三省堂五十音引き漢和辞典』(二〇〇四年)に、本稿の筆者が示したものに依る。ただし、字音の歴史的仮名遣い(字音仮名遣い)では、漢音・呉音が相違しながら、現代の仮名遣いではその区別がつかないものは、「同音」に入れた(例「窓」(ソウ)(サウ)

●特集 漢字音研究の現在

(漢U・ソウ(呉Uなど))。

結果は、次の通りである。

漢音呉音同音	九五〇	慣用音	九八
漢音	七五二	唐音	一四
呉音	五三八		

右のとおり、新「常用漢字表」二三五二音のうち、最も多いのは、漢音と呉音とが同音のものである(注2)。右の分類では、漢音は呉音よりも二〇〇余り多いものの、「基本となるのは漢音」と言えるほど、呉音との間に圧倒的な差は無い。

ところが、この新「常用漢字表」の音訓は、「特別なものか、又は用法のごく狭いもの」を「1字下げ」で示している(注3)(新「常用漢字表」の「表の見方及び使い方」、参照)。この一字下げされた音一四一に限って、右の音種を区別すると、左ようになる。

漢音呉音同音	九	慣用音	二九
漢音	二二	唐音	七
呉音	七四		

すなわち、「特別なものか、又は用法のごく狭い」音の、過半は呉音である。具体的には、「帰依」のエ・「香華、散華」のケ・「夏至」のゲ・「象牙」のゲなど、この一四一字中に、「伝来が早い語や仏教に関する語」に用

いられる呉音が多いことは、確かである(注4)(本誌中澤論文、参照)。

ここから、現代日本語において、呉音が頻用されない漢字が存することは、確認できる。

しかしながら、「央(オウ)・応(オウ)・横(オウ)・音(オン)」など、呉音でも、新「常用漢字表」の最初の音に掲げられているものは、現代において未だ生産力を持つ。さらに、新「常用漢字表」にこのたび追加された漢字・音にも、「臆(オク)・蓋(ガイ)・隙(ゲキ)・捉(ツク)・麵(メン)」など、三三の呉音が含まれている。

よって、呉音は伝来の古い語にのみ残存するに過ぎない、という一般認識があるならば、それは改められる必要がある(注5)。

ただし、日本語史上、呉音から漢音へ変化する大きな流れは存する。そして、その実態を捉えた研究が、公表されている(注6)。それらの研究では、一字一音・一漢語一音となる変化が進行すること、その固定する一音は漢音である場合が多いことが、言われている。

しかし、時代を通じた、幅広い資料の音についての実態把握は容易ではなく、呉音から漢音への変化の原因究明も、多くは今後の課題として残されている。

3 漢和辞典が掲げる「漢音」

右は、『三省堂五十音引き漢和辞典』の漢音・呉音等の認定を、新「常用漢字表」の音に当てはめた結果であった。

本誌佐藤論文にも記される通り、現行の漢和辞典における漢音・呉音などを比較すると、相違が見られる。したがって、依拠する漢和辞典が異なれば、右の数は異なる。それは、漢和辞典によって、漢音・呉音等の認定方法が異なるためである。

その、漢音・呉音等の認定方法は、韻書の反切や韻図などに基づく理論的な方法を探るか、日本の古文獻に記入されている漢字音に依る実証的な方法を探るかの、大きく二つに分けられる。

手元の辞典を例に挙げると、諸橋徹次『大漢和辞典』修訂第2版（新装普及版）（一九八九年、大修館書店）・柴田猛猪ほか編『大字典』（一九一七年、講談社）などは前者であり、佐藤進ほか編『漢辞海』（二〇〇〇年、三省堂）は後者である。『三省堂五十音引き漢和辞典』の音の記述でも、後者の実証的な方法を採用した。

たとえば、『大字典』の「凡例」では、漢音・呉音については、「漢・呉両音は韻鏡を標準とし、反切により

て之を定めたり。」と記されるのみである。

これに対して、『漢辞海』の「本辞典のねらいと特色」には、次のように書かれている。

▼日本漢字音 日本漢字音は、漢音・呉音・唐音・慣用音を表示し、その歴史的字音仮名遣いをカッコに入れて示した。漢音呉音については、江戸期以後の推定や演繹による読みを退け、鎌倉室町以前の古辞書などにのこる字音資料にもとづくことにした。それによって、これまで慣用音とされてきたものの多くが、正当な漢音呉音として位置づけられた。

▼歴史的字音仮名遣い 「玄」「還」のような漢字の鎌倉室町以前の表記にはゲンという形が見られる。しかし、本居宣長がヰ・エ・ワの三タイプある合口（「ㄱ」の要素を含む音）の拗音のうちから、ヰ・エのタイプを除外して以来、今日の歴史的仮名遣いではゲンなどは無視されてきた。本書では、字音資料に記載のあるものに限って、これらを宣長以前の形で記述した。

このような基本的態度の相違によって、現行の漢和辞典に掲げられている漢音・呉音等の「歴史的字音仮名遣い」には、少なからぬ相違が存する。

この相違は、現代仮名遣いでは解消されるものが多い。

●特集 漢字音研究の現在

しかし、「歴史的字音仮名遣い」を定めようとすると、多くの問題が存する。

4 「漢音」における「歴史的字音仮名遣い」

漢音の「歴史的字音仮名遣い」は、右の引用にもあるとおり、「鎌倉室町以前の古辞書などにのこる字音資料」にもとづくべきである。

ただし、残存資料から、掲出字の漢音を見出せないものも存する。その場合、日本漢音の体系上、同音と考えられる別漢字の漢音を掲出することとなる（注7）。

幸い、日本漢音の体系は、先学の研究によって、大部分、判明している（注8）。

しかし、中国の韻書において同一声母・同一韻・同一声調の漢字であっても、日本漢音資料では別音が記されている漢字も存するため、右の推読は、呉音と比較して体系的である漢音についても、万全ではない。

さらに、古文獻に当該漢字の漢音が見出せた場合も、その音は一樣ではない。時代差と位相差とが、その主要因である。

漢音は、呉音に比して新しい音ではあるが、『日本書紀』にすでに用いられている。その奈良時代の漢音と、

平安初期の漢音、平安中期の漢音、平安後期の漢音には、それぞれ小異が見られる（注9）。このうち、「新漢音」と呼ばれる、密教の声明しょうみょう読誦音として、平安初期に輸入された音を別にしてもなお、漢音には、連続した幾層かの音が存したことが言われている（注10）。

したがって、どの時点の漢音を、「歴史的字音仮名遣い」の根拠とするかを、まず、決めねばならない。

この拠り所とする時期を、仮に、和語の歴史的仮名遣いが拠って立つ十世紀後半に決めるとする。

ところが、すでにこの時期、仏典学習の場では、梵語学習の影響を受け、中国語原音を厳密に区別する「新漢音」の学習が行なわれていた。仏書漢音資料である『仏母大孔雀明王經』の古訓点にも、その「新漢音」の影響が見られる。それに対して、同時期の漢籍訓読資料には、そのような形跡は見られない。

この、同時代における漢音の多様性は、どの時代においても、程度の差はあれ、見られる。

本稿の筆者は、平安・鎌倉時代の漢音を、1「字音直読資料」2「漢籍訓読資料」3「仏書訓読資料」4「和化漢文訓読資料」5「音義・字書」6「辞書」の六グループに分け、各グループの漢音に相違を指摘したことがある（注11）。この六グループの音を比較した結果、

音形・声調とも、1字音直読資料・2漢籍訓読資料は規範的であり、3仏書訓読資料にはそれより日本語化した漢字音が記されていることが知られた。また、4和化漢文訓読資料では、3よりさらに日本語音化が進行していた。5音義・字書と6辞書とでは、5音義・字書の方に、より規範的な漢字音が見られた。

右のような事情で、和語の「歴史的仮名遣い」に相当する「字音の歴史的仮名遣い」には、統一基準を定めがたい。現状では、統一基準が無いと言えよう。

5 現在における日本漢音研究の課題

筆者は、現在における日本漢音研究の課題を、以下のようになっている。

1. 規範的な漢音体系をさらに確実なものとする
現在のところ、日本漢音の体系は、『蒙求』『佛母大孔雀明王經』『文鏡秘府論』『大慈恩寺三藏法師伝』の諸本中、一本または二本の整理に基づいて構築されたものでしかない。さらなる資料蒐集と整理、その結果の公刊が必要である。

2. 規範的な漢音の変遷を叙述すること

従来の研究によって、字音直読資料、辞書・音義等に

表れる規範的な漢音も、時代とともに変化することが知られてきた。しかし、その変遷の実態は、不明の部分が多い。

3. 幅広い資料における漢音を究明すること

辞書・音義・訓点資料ばかりでなく、仮名文・文書等における漢音をも、考察対象とする必要がある(注12)。

4. 漢字音体系相互の影響関係を捉えること

現存する古文獻に、純粹な漢音資料・呉音資料は、存在しない。漢音直読資料『蒙求』にも、わずかながら呉音が見られ、呉音直読資料『法華經』『大般若經』等にも、漢音読語が入っている。和化漢文訓読資料では、同時代の字音直読資料・漢文訓読資料と比べて、漢音・呉音を混じる度合いが高い。また、『源氏物語』『枕草子』などの和文中の日本漢語は、呉音読を中心としつつ、漢音読をまじえている(注13)。

右のような実態であるため、共存した日本漢字音体系の影響を、考慮する必要がある。

5. 日本語音との影響関係を捉えること

漢音は、日本語音からどのような影響を受けたのか。また、日本語音は、漢音の影響をいかに受けたのかを、追究しなければならない。その上で、日本語音韻体系の中に、各時代の漢音を位置づける必要がある。

特集 漢字音研究の現在

6. 並存・変化の理由を考察すること

古代の日本漢音は、使用者の学習度合い、使用目的、使用の場の相違によって異なっていた、と考えられる。その差は、声調に顕著に表われている（本誌加藤論文、参照）。

そのような漢音が、同時代に並存した理由、それらの音が変化した理由、まさにその時に変化した理由、などの考察をなすべき段階に至っている（注14）。

また、同時代同地域の漢音に個人差が存したか否か、という問題設定もできる。考察可能な資料が得られれば、研究してみたい（注15）。

6 むすび

文物・思想・宗教とともに、中国から語が輸入され、その時々中国語音が、漢字の「音」として日本語に留まった。それに加えて、日本語は、日本漢語を作成し、表現を豊かにしてきた（注16）。ことに、江戸時代末から明治にかけては、西欧の文物・思想の受け入れに日本漢語が用いられ、その多くが漢音で読まれた（注17）。

そして、現代もなお、新しい日本漢語が作り出され、常用漢字表・漢和辞典に記される、漢音・呉音等で読まれて

いる。日本漢語の新造は、将来も、続くことであろう。日本語を文化と捉えるならば、それを支える日本語音・日本漢字音の歴史を知ること、日本語文化の未来を考える手がかりが得られるはずである。

注

1 新「常用漢字表」は、二〇一二年一月現在、文化庁ホームページで公開されている「常用漢字表」（平成22年11月30日内閣告示）に依る。

2 漢音呉音同音の漢字には、次のようなものがある。1. 中国語音において漢音・呉音の差が存しないもの。2. 日本語と比較して複雑な中国語音上に差が存しても、日本語では、その差が捨象されたもの。3. 声調（アクセント）のみの相違であり、仮名書きに差が反映されないもの。

3 この配慮は、昭和五十六年内閣告示「常用漢字表」においてすでになされている。両者の相違は、この三十年間の日本語における主要音調の変化を知るきっかけとなり、興味深い。しかし、今回のテーマと異なるため、本稿では触れない。

4 先の総数から、この一字下げの音一四一例を除けば、漢音呉音同音一四四一、漢音一七三〇、呉音一四六四、慣用音一六九、唐音一七となる。

5 松井利彦『近代漢語辞書の成立と展開』（一九九〇年、笠間書院）第五章には、明治初期において、漢音と呉音とは、漢文訓読文―漢音、通俗文―呉音と、「位相を異にする音」であったことが指摘されている。同「明治期漢語辞書の諸相」（『明治期漢語辞書大系 別巻三』（一九九七年、大空社））、同「明治中期の漢音と呉音」（大野晋先生古稀記念論

- 文集刊行会編『日本研究 言語と伝承 角川書店』、一九八九年十二月）、同「文体要素としての漢字音」（『国語と国文学』二〇〇二年十一月号）等も、参照。
- 6 来田隆『抄物による室町時代語の研究』（二〇〇一年、清文堂出版）第三部付録、沼本克明『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』（一九八二年、武蔵野書院）付論第三章、飛田良文『東京語成立史の研究』（一九九二年、東京堂出版）等、参照。
- 7 実証的な方法を徹底させれば、根拠を見出せない漢音は表示しないのが厳密な態度である。しかし、現実には、「漢音はすべての漢字に付す」という辞書編纂方針が定められることが有り、「推定や演繹」は完全には排除されていない。『三省堂五十音引き漢和辞典』の「漢音」も、その方針であった。
- 8 日本漢音と呼ばれている音の体系は、唐代中期の長安方言音に近いことが言われている。中国語音韻史で、『切韻』に代表される中古音には見られなかった音変化が、日本漢音に反映されているためである。詳しくは、有坂秀世『上代音韻攷』（一九五五年、三省堂）、同『国語音韻史の研究 増補新版』（一九五七年、三省堂）、満田新造『中国音韻史論考』（一九六四年、武蔵野書院）、水谷真成『中国語史研究』（一九九四年、三省堂）、注（6）沼本著書、沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』（一九九七年、汲古書院）等、参照。
- 9 佐々木勇『古代漢字音の受容と展開』（『文字と古代日本5 文字表現の獲得』二〇〇五年二月、吉川弘文館）、参照。
- 10 沼本克明『漢音系字音』（『朝倉日本語講座 2 文字・書記』二〇〇五年、朝倉書店）所収、参照。なお、『唐音』にも、同様の事情が有る。肥爪周二『唐音系字音』（同上著書所収）、参照。
- 11 1 「字音直読資料」は音で通読した「蒙求」などの漢文音読資料、2 「漢籍訓読資料」は「論語」「毛詩」などの漢籍を訓読した資料、3 「仏書訓読資料」は『大慈恩寺三蔵法師伝』『大唐西域記』などの仏書訓読した資料、4 「和化漢文訓読資料」は『将門記』『本朝文粹』などの日本漢文を訓読した資料、5 「音義・字書」は『孔雀経音義』『類聚名義抄』などの音義・漢字辞書、6 「辞書」は『倭名類聚抄』『色葉字類抄』などの国語辞書、という大分類をしてみた。佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』（二〇〇九年、汲古書院）、参照。
- 12 築島裕『平安時代語新論』（一九六九年、東京大学出版会）、注6 沼本著書第二部第二章第一節、沼本克明『日本漢字音の歴史』（一九八六年、東京堂出版）、等参照。
- 13 柏谷嘉弘『日本漢語の系譜―その摂取と表現―』（一九八七年、東苑社）、参照。
- 14 清原宣賢（一四七五年―一五五〇年）の漢音声調については、文献の種類による漢音声調の差が存したことを説いたことがある（注11 佐々木著書第三部第八章。呉音についても、諸種の自筆文献が残存する親鸞遺文を用いて、同様の考察が可能であろうと思う（上記著書第三部第五章、参照）。
- 15 親鸞と恵信尼、親鸞と明恵との間に、字音の差が存したことを述べ、その理由を考察した。佐々木勇『鎌倉時代における漢字音の個人差―親鸞と恵信尼との比較―』（『古典語研究の焦点』二〇一〇年、武蔵野書院）、同「親鸞と明恵の漢字音―漢字片仮名交じり文における比較―」（『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第五九号、二〇一〇年十二月）。
- 16 山田孝雄『國語の中に於ける漢語の研究』（一九四〇年、實文館。一九五八年、訂正版）、佐藤喜代治『漢語漢字の研究』

特集 漢字音研究の現在

究」(一九九八年、明治書院)、柏谷嘉弘「日本漢語」(『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』一九九八年、汲古書院)、参照。

17 注6 飛田著書、参照。飛田は、漢音で読まれた理由として、漢字の流行・一般的な漢語辞典の普及・義務教育の普及を挙げている。なお、これらの日本漢語は、中国・朝鮮半島でも受容・使用された。沈国威『近代日中語彙交流史』(一九九四年、笠間書院。二〇〇八年改訂新版)、荒川清秀『近代日中學術用語の形成と伝播』(一九九七年、白帝社)、陳力衛『和製漢語の形成とその展開』(二〇〇一年、汲古書院)、朱京偉『近代日中新語の創出と交流』(二〇〇三年、白帝社)、李漢燮『主義』という語の成立及び韓国語への流入問題」(宮地裕・敦子先生古稀記念論集刊行会『日本語の研究』一九九五年、明治書院)、同「近代における日韓両語の接触と受容について」(『國語學』五四卷三号、二〇〇三年七月)等、参照。

(なださき・いさむ 広島大学教授)

財前 謙 [著]

字体のはなし

超「漢字論」

文字は本来手で書くものである、という考え方から、手書きと印刷活字の漢字の違いや、楷書・行書、明朝体・宋朝体、新字体・旧字体、異体字、拡張新字体など、漢字のさまざまな字体の不思議について、具体的に身近な例を盛り込みながら解説。本書を読み進めていけば、自信をもって漢字の運用ができるようになる。将来に向けて、きちんとした字体の運用を考えるために欠かせない一冊。



定価1,260円
(本体1,200円)

四六判・170頁

書家として、また、専門家として語る、驚くべき楷書の事実!

明治書院

〒169-0072 東京都新宿区大久保1-1-7 TEL.03-5292-0172 FAX.03-5292-6183